



か自分達の手で解決していかなければならぬのです。けつしてそうではないことをこの我孫子の地で証明していかなければなりません。自然と人間は一体です。切りはなすことは出来ません。

自然の恵みの中にあつて、人間は、心の安らぎを感じ、豊かな気持ちを持ち、純粋にもなつていけます。

私達は、ここでもう一度、昔の我孫子を再現しようではありませんか。手賀沼周辺には、きれいな小川が流れ、うなぎ、どじょうなどが泳いでおりました。山あいの清水には、小さな沢がにが、遊び、沼は底までみえました。沼辺の田んぼには螢とびかい、菜の花が咲き乱れ、葉やとんぼがとびまわりそれはのどかな田園風景でした。この貴重な自然の宝庫を守り、花を植え、木を増やし、鳥をよび、豊かな、我孫子を作りたいものです。

私は下図のような目標を作ってみました。

昆 虫	茂れる植物、花
野 鳥	豊かな水
小動物	人間の暖かい心

ほ ー ほ ー ど り

渡 辺 藤 正

子供ごころにはなんとなく怖かった。

結婚したばかりのころ、今の緑保育園の前に住んでいたの、香取神社の大木から夜になると「ホー、ホー」という声がきこえ、都会育ちの妻が無性に淋しがつた。これも今ではなつかしい語り草になっている。

鉄とコンクリートの都市化がすすむ今日、

「ホー、ホー」の声を聞くことはほとんどない。けれども、野鳥を受する仲間たちの協力を得て、我孫子の自然、文化財を保護したい。  
(我孫子市長)

無 題

天 羽 武

鳥類にかぎらず、自然界の生物の研究はまず各種の名称を知り、進んで近似種との区別ができるようにならなければ、研究は勿論、それらのものに対して何等、愛さえも感じないであろう。

この頃は、漸くアマチュア間に鳥類の研究が盛んになって来たが、他の動植物に比べると長い間、かえりみられぬ立場にあつたことは事実である。というのは、つまり鳥類は、植物や昆虫、貝類等と異なり、容易に採集して品種を知り、又、それを我が標本箱の一員として加えることが困難であるという点、標本収集を唯一の喜びとする人たちにとっては一向に興味にそわぬことであろう。元来、標本収集は分類を目標とする形態学の研究が主な目的であるが、鳥類ではこの分野は今迄、既に、余地のない程進められている。それにもかかわらず、野外における生態学的研究は他の動植物よりもはるかに遅れているという状態なのである。

まず、野外で鳥類の識別に熟練し各種の習性を詳細に知り、進んで、いろいろの比較研究をしたり、又、環境との関係等を研究することは興味深い研究であるが、これは、野外において、自然に親しんでこそ、初めて得られるものである。……………以下略

この文章は、昭和13年発行の「野外鳥類図譜」(下村兼史著)のはしがきである。

昭和13年といえ、自然はいたるところに残っていた。人間は自然の中で生活していたのである。四季折々の植物や野鳥の去来に

よって自然のうつりかわりを敏感に知ったのである。

然し、そうした自然は、いつの間にか人間の周囲から消え去ろうとしている。人間の視はかな知恵によって破壊されているのである。自分の所属している「自然と盆栽友の会」でも、出来る事から実行しよう一災害を防ぐためにも一三つの提言として、

1. 大地は水分を求めている。地中はかれてサバクになっている。
2. 大地は呼吸をしている。固められて、土も草木も窒息している。
3. 大地は堆肥を求めている。土はやせて、地力を失っている。

このようなことを実行することによって、魚虫草木を育て、鳥獣人畜の休養の場を、それぞれの分に応じて作り、人間生活にとって大切な、失われつつある自然を取りもどし、ギスギスした現代の「心の燈」としようといひかけている。

生花を見て、「きれいな花だ。造花のように美しい花だ。」と言った人がいるそうだが現代の人たちは、人工のものを基準にして自然を比較するような傾向が強くなっている。不図した会話の中にも「造つたように美しい」という表現を耳にするが、それ程、私たちの心は自然から遠のきつつある。

こうしたとき、我孫子野鳥を守る会が発足したことは、非常に意義のあることである。

私は、野鳥について全くの素人ではあるが冒頭に引用した下村兼史氏の言葉をよくかみしめ、微力ながら、この会の発展に協力したいと思っている。



## 思いつくまま

三谷 澄子

私共が野鳥とのつきあいはじめたのはもう20数年も前のこととなります。その頃は琵琶湖畔の大津に住んでいて、友人に誘われて比叡山での一泊探鳥会に参加して一度でその魅力にとりつかれてしまいました。御寺に泊ることもはじめての経験で朝四時前に起床夜明け前のほの暗いひいやりとした外気に思わずコートの手を立って歩きはじめました。当時は御健在だった京都野鳥の会会長の故川村多実二先生のあとについて歩いているうちにだんだんと朝もやがはれて来ていろいろの鳥たちの声が美しい合唱の様にあちらの谷、こちらの森からきこえはじめるとその一声一声ごとに「今ないたのは三光鳥、ツキヒボンとないたでしょう。ホラ、あれはツツドリ、ボンボン、ボンボンと竹筒をたたいた様な声だからツツドリというのですよ。センダイムシクイはシヨウチウイッパイグーとなくからよく気をつけてきてごらん下さい。次はオオルリ」等と教えて頂き、はじめての私はただただおどろくばかりでした。川村先生はその御著書「鳥の歌の科学」等に見られる様に特に鳥のなき声に御造詣深く、又短歌、絵をよくされ、鳥に関するものばかりを造っておられました。日本の国内だけでなく外国にもよく知られた方に最初の野鳥との出会いを指導して頂けたことは本当に幸だったと思います。

「尾をひきて、わか葉のかげにとびゆきし

三光鳥は さやかになくかも」

これは比叡山での川村先生の御歌ですがその頃はこんな光景にはいつでもめぐりあえたものです。

それから十年余を経て再び関西(京都)に住む事になり早速又探鳥会にせつせと通いましたが十年の歳月鳥の数をずっと少なくし

てしまっていました。それでも貴船、鞍馬等はまだまだ野鳥の宝庫と言えましたし、仁和寺近くの我が家でも初夏には毎日ホトトギスの「テフベンカケタカ」という声がきけたものです。キバツリを見たのもその頃の比叡山でした。あちらこちらにドライブウエが出来る便利になると共にだんだん鳥の住むところが少なくなつて来て「自然を大切にしましょう。公害をなくしましょう」等と言ひ出します。その自然を破壊したり、公害をつくつたのも同じ人間なのでから人間とは勝手なものです。

我孫子に落ち着いてそろそろ8年になります。戦前手賀沼が美しい湖だった頃、冬が来ると湖水が真黒になるほどとんで来ていた鴨の類もまるで少なくなつて埋立てをはじめた頃からは全然と言つていい位姿を見せませんでしたが埋立ても終り、禁猟区になつてからは又少しづつ数をましてきた様に思われます。我孫子野鳥を守る会が出来たときいてよろこんで御仲間入りさせて頂いたことは申す迄も

ありません。回を重ねるごとに御顔なじみも出来て来て殊に若い方たちがクラブ活動等に野鳥を取り入れて活躍していらっしやるのを見るとたのもしい限りです。小学生、中学生高校生と若い仲間が「野鳥に関する限りは僕たち、私たちにまかせて下さい」と言える様なグループを沢山作つて我孫子を、そして日本を野鳥の天国にしたいと思います。その為には私たち大人が出来るだけの力添をしてよい環境を作る様に努力しなければなりません。3才の坊やから80才のおばあちやまでをまじえた毎日の探鳥会もムード派あり、研究派あり、さまざまですがとにかく可愛らしい鳥たちの姿を見たり声をきいたりしながら歩いていると5キロ位の道のりはいつの間にか過ぎてしまい年令差等は全然感じられなくなつてきます。寒い北風の中や、カンカン照りに汗をふきふきでも季節によつてちがう鳥たちの生態の観察を地道につづけて行きたいと思ひ出来るだけ多くの方に参加をおすすめしたいと思つています。

## レンズ遣む

(探鳥会に参加して八句)

湖北台六丁目 中 ひろし

涼しさや瞳聚めしひわの梢

レンズ澄み顔白高音の咽喉たり

沼眩し遠き雪加へ耳澄ます

白鷺のそよぐ冠毛まざとかな

とまりをる大葎切の斜のポーズ

あなたなる五位鷺現れぬ遠眼鏡

軽鴨の子の潜き羨しも真昼の日

握飯欲しと眼の青葉木菟

## 帰ってきたホタル

坂 巻 忠 雄

ドーン、ドーン、夏の夜空を彩る花火、今夜は利根川（取手）の花火大会です。

布施の遊水地帯より見物しようと子供達をつれて出かけました。

布施弁天近くを走り過ぎる頃から派手な音とともに光りの花が咲いては散っています。花火は夏の夜の風物としていいものだ。

遊水地帯を利根堤へ向けて少し走った時です。花火の光りとは反対の窓をスカー、スカーと横切るものがありました。

「アッホテル」車のライトを消し外に出た。夜の暗い田圃で黄金色に熟した稲穂がみえるではありませんか。多数のいや無数の小さな光がゆらぎそしてとまっていますのです。

それはみごとに実った稲穂が輝いているようです。

東北地方の民謡で

「ササニ黄金ノアアマタア ナリサアガール  
スツチヨイ スツチヨイ スツチヨイナ  
ー」

こんな文句がピョタリするような有様です。

私は布施で生れ育ちました。子供の頃ウチワや竹笠を持って、この近くでホタルとりをしました。

数匹のホタルをつかまえ大事にもつて帰り母がつてくれた蚊帳の中に放し電気を消しました。そして小さな光りを目で追いながらいつのまにか眠りこけていった子供の頃が懐かしく浮かんできました。

今は立場が代って自分の子供達が両手をひろげながらホタルを追いかけています。すぐ近くの池から発生したのでしょう。

30年近くも姿を消していたホタル、きつと農業等の制限で再びかえってきたのでしょう。それも多数かえってきたのです。

まだ子供達は希望の光りを追いかけてでも

いるようにイキイキとして右に左に動いています。今夜は実家から古い蚊帳を出してきてつってやろうかな。

花火はまだまだつづいています。

## 野 鳥 雑 記

吉 田 昇

### イヌワシ

日本で観られるワシの中で、イヌワシは長野県大町市で、オジロワシとオオワシは宮城県伊豆沼と茨城県の武具池で観ている。

昔の古典、伝説などに知るワシが人間の赤ん坊をさらうということは本当だろうと思えてしかたがない。それも人里離れた山間地ならイヌワシだろう。最近マンガが氾濫している。だから自然に目に入る機会が多い。泣き叫ぶ子供を足にぶらさげた大きな鳥に向かって農民姿の母親が鎌をふり上げている。マンガの作者はイヌワシとは知らないまでもワシは山にしか居ないものだと思っている節がある。そういう私も子供の頃ワシは山だけにしか住んでいないと思っていた。イヌワシは全体に褐色味が強く、黒っぽくさえ見える。嘴は灰黒色で地味な感じを受けるが勇猛果敢さは言うまでもない。野武士か山伏を思わせる精悍な顔つきをしている。パンダ交換大使のニホンカモシカを養った大町山岳博物館にも雄大な北アルプスを背景にしたゲージの中で私を眺みつけた顔が思い出される。山に行かれたら他のワシに比べて飛翔時、頭の出具合が少ないので、識別出来ると思う。しかしそう簡単にはお目にかかれないことを記しておく。

### カワセミ

カワセミが身近かなところから観えなくなつて久しい。かつて松本市郊外のボート池で水面すれすれを一直線に飛んで行く小鳥を見

たとき背いすじが飛んでいるという感じであった。スズメ大の大きさで、せいぜいクチボソぐらいの小魚しか喰べない様である。年々悪化して行く環境の中で姿を消して行く筆頭クラスだろう。しかし私は我孫子周辺で観られるような気がしてならない。湖北団地の奥つまり東側、印西あたりは水郷を思わせる様などところがある。水もよし、人家も少ないときて土手もなきにしもあらずの環境である。

そして手賀沼も遠い将来は水道源の池になるらしい。このニュースを新聞で知ったときしめたと思った。狭山湖の様にきれいになればこの沼では珍しいトモエガモやヨシガモ、それにオンドリまでも欲ばってみた。もちろんカワセミも。

#### トラグミ

菅平の麓、須坂側に仁礼村というところが

ある。親戚でのごことである。野良から帰ってきたいたこが私に鳥をくれた。今でこそトラグミと解かるけれど、当時は何ともわからない。嘴はやけにとがっているの、動物性の食べ物だろうと思い、小さなカエルを与えると5つも6つも食べるのである。幼鳥なので、どことなく甘えてくる。コイの腹ばたもやってみたが、これはさすがに喰べなかつた。

キジバトぐらいの大型のトラグミである。深山の霊鳥なぞとその鳴き声から言われているが、多摩霊園近くの住宅地などにも出没するのである。手賀沼周辺で山階鳥類研究所の笹川さんもこのトラグミを観察されている。飛んだ時、黒っぽい翼の下に白帯が出るので判別しやすいという。全体は黄色い斑点だらけの鳥なのだが、市街地に来る冬期に注意してみよう。

## 行 事 案 内

### ◇ 手賀沼探鳥会（雨天中止）

月 日 11月10日（日）

集 合 我孫子市役所玄関前 9時

予定コース 市役所—手賀大橋—沼南岸沿いに探鳥—柏文化会館—柏駅  
解散 15時頃（徒歩約8キロ）

その他 昼食持参、はき物は長靴かズック靴がよいと思います。防寒具もお忘れなく。

晩秋の一日、自分の足で美しい自然を訪ねてみましょう。鴨も一応揃った頃です。

後記 会報第1号、7.8月号として編集印刷にまわしたのですが、地元の印刷屋さんからキャンセルされ、おそくなってしまいました。原稿をおよそ頂いた方々に遅刊を深く御詫び申し上げます。

我孫子野鳥を守る会会報

発行所 我孫子市 須坂 556 (TEL 02-7721)

### ◇ 印旛沼探鳥会（小雨決行）

月 日 12月8日（日）

集 合 我孫子市公民館玄関前8時50分  
出 発 9時 バスで往復（解散16時頃）

参加費 大人100円 中学生以下50円

今回は少し速出を計画しました。鴨類の他タカの仲間にあえるかもしれません。

利根川にハクチョウが来ていれば、そこにもとります。

なおバスの定員50名に付予約申込み下さい。申込先 電話82局0521（会長宅）

2カ月に1回は発行したいと思っております。皆様の声で誌面を賑やかにして載せたい。どうぞ、短文でも結構です御投稿願います。

今年はまだ猪苗代湖にハクチョウが渡来したそうです。（10月20日 高橋記）